

三度叱る

2025. 6. 26

イタリアのローマ日本人学校にいたときだった。同僚である先輩教員から「父親が息子のことを叱るのは三度だけでよい」という話を聞いたことがあった。そのとき、我が家の息子は2歳だった。妙に先輩の言葉が心に残った。今でもずっと覚えている。

この言葉の出所、出典はどこかということもずっと気になっていた。ついにそのときがきた。この前、たまたま次の言葉と出会うことができた。

父親は息子に対して、一生のうちに三度叱るか、それとも一度も叱らないか、どちらかにはらにくくらなければならない。

たぶんこれだろう。森信三先生の言葉である。森先生は、我が子の人間教育、とりわけ基本としての躾の責任は、その9割までは日常の大半をともに過ごす母親にあり、父親の役割は、自分の人生観に基づいて人間としての生き方の方向を示すこと、言い換えれば子どもに生き方の種まきをするところにあると説いている。

そのためにはまず、我が子の一挙一動について一切小言を言わないというのが父親の根本態度であること。そこにかえって父親の威厳というのがあると教える。さらに森先生は、とりわけ年頃の息子に対して心がけなければならないこととして以下のことを言っている。

娘の場合は、異性ということもあり、父親のことが息子から見よりはよく理解できるようである。年頃の息子というものは、いわゆる同性の反発で、呼吸が詰まるように思うものである。にもかかわらず、事細かにいちいち叱りつけることは、息子にとっては我慢のできない事柄なのである。

たとえよくない点があったにしても、よほどのことでない限り、心中深く納めて、それに対してあれこれ言わないこと、絶対に叱らぬという決心、つまり怒らぬ覚悟が大事であり、そこに父親としての人間修行がある。

時代が違うので、そのまま受け取るわけにはいかないだろう。だが、なるほどと思わせられるところがあることも事実である。もう少し早く、この言葉と出会いたかった。すでに息子のことを叱ったことがある父親としては、もはや一度も叱らないという選択肢はない。まだ三度にはなっていない。だが、これから先、息子のことを叱ることなどやってこないような気がする。時間を戻すことはできないものだろうか。もし可能であるならば、一度も叱らないコースを歩んでいきたい。